

俳句雜誌

空

空

令和元年9月25日発行

第17巻4号

通巻第86号



2019・8・9

SORA 86号

三十三句

柴田 佐知子

竜天に登る赤子は籠こに眠る

大輪の牡丹一步も引かぬなり

惨殺の地は寺となり青楓

遺書の文字散りて螢となりにけり

螢火や闇の芯なる秘仏堂

高くなる螢柱に紛れたし

夏帯や戻れぬならば振り向かず

夕刊を畳にひらく白雨かな

海底に闇の一世やレース編む

濁り鮎ひるがへるとき輝けり

普段着の母いきいきと柿の花

泥こねて天地創造日焼の子

草の色膝に滲ませ草むしる

地獄まで伸ぶる根ならむ草を引く

玄海のうねり豊かに夏祓

葦の花村に海鳴りゆきわたる

遠泳の勝者しばらく浜に伏す

ふくらみは大方古墳みなみ風

王は墳へ民は土中へ黄雀風

瑠璃色の女王の杖蛇となる

幾たびも歴史の裏へ土蜘蛛は

空つぽの古墳ばかりや花みかん

円墳の形分からぬまで茂る

草叢に今見し蛇の息こもる

麓まで力を抜かず夏の山

修験者の踏んでゆきたる山の蟻

炎天の巖に伸ぶる行者道

石段の尽きて神在す雲の峰

一晚で激流となる青胡桃

鬼はみな討たれて瀧の轟けり

水打つて昔の人を待つやうな

公家貌の猫が居るのみ夏座敷

黒ビールこの世の端のこの椅子よ

福岡 高倉 和子

大花火川を揺らしてみたりけり

海底の盛り上がりくる箱眼鏡

遠泳の使ひ切つたる手足かな

石段にはりつく猫や朝曇り

健康なひと日の疲れ夜のプール

何事もなかつたように水を打つ

廃校にしづもる塵や夏の雨

素に戻る夜の鏡や涼新た

東京 中田みなみ

母の日の旅促せりそれとなく

茶畑に明け易の空下りて来し

指先に纏る新茶摘みにけり

茶摘女に声掛けて行く出前持

茶を購うて苗木貰ひぬ五月富士

疲れ目を白に休まず牡丹園

盆栽の針金外したき暑さ

曲るとき振り向く泰山木の花

福岡 柴田志津子

長崎 荒井千佐代

田起しや触れてはならぬ狐塚

厨より灯る家々花朱燦

道迷ふだんだん蝮蛇草増ゆる

雨の日の噴水雨も噴き上げて

天草を積む町の名は網屋町

眠りさへすれば明日や夜鷹啼く

まだ霧の中に居るなり昼寝覚

川船に夜濯のもの干されあり

根を張りしやうな藁屋や鵜渡る

波殺しに潜む波音花とべら

猿酒の在り処を問へば笑ふのみ

金箔をやたら散らして夏料理

祖より継ぐ緋の半被放生会

箱庭にちちの文机ははの櫛

桔梗や齡を言へば褒められて

訣別のための香水耳朶に

埼玉 服部 早苗

指先に冷えのあつまる桜時

画眉鳥の声の織りなす春の山

割り箸にすくふ水飴養花天

紙切りに舞妓浮きでる春の宵

壁なづるだけの春蚊の出でにけり

更衣村縦横に水走る

黒南風や端溪硯のうす窪み

白熊に届けられたる花氷

福岡 岸 洋子

宿り木の豊かなみどり夏来る

駄弁の奈良漬薄し麦の秋

一声の餅ひろぐる山法師

誰に渡すでもなく桜貝拾ふ

潮干狩右も左も知らぬ顔

舟底に一枚の莫座梅雨晴間

二タ部屋を散らしひとりの更衣

酔少し残る足どり夕螢

北九州 深川 淑枝

堰を越す水なめらかや遅桜

川底の影も鱗もつ春の鯉

舟待ちの川のくびれや柳絮とぶ

蛇穴を出るや翳りし山の色

にはとりの黄の脚走る立夏かな

筍を打つやくもりし鋏の音

石棺に石の枕や若葉冷え

屈葬の甕のなで肩水温む

広島 戸栗 末廣

春昼の仏に一つづつの影

回廊を素足で渡る朝ざくら

永田町とは花冷えの空の下

花ミモザ大きな風を孕みたる

墓石の文政二年囀れる

老人を揺さぶる牡丹ざくらかな

花つつじ朝の勤行はじまりぬ

天辺は風の通へる今年竹



福岡 角野良生

金平糖どの一粒も春の色

まづは目で春の小流れ跳んでみる

かげろふや身振り手振りの測量士

用もなく教会に寄る花の昼

手の甲にメモするナースあたたかし

囀りを織り込んでゐる手織機

てふてふと飛びてふてふと止まりけり

風船も二つ双子のベビーカー

千葉 原 友 子

竹皮を脱ぐ鉄瓶の湯の滾り

糠足して糠床覚ます立夏かな

蟻走る奉納の杓乾ききり

葉桜や昼は真白き常夜燈

竹林に透く水無月の村十戸

福岡 秋 津 令

小さきもの弾かれてゐる驟雨かな

さつきから目の合ふ二人濃紫陽花

逆さまに映る山百合湖の風

蚊の声や洗濯物で振り払ふ

形代の裏も表も同じ色

福岡 田 代 貞 香

菜の花のゆつくり暮れてゆきにけり

天井の龍のうねりや春の雷

ひとひらのあとたちまちに薔薇崩る

立葵ふいに始まる子の遊び

宿を発つ朝の囀はや高し

福岡 山 内 碧

灯台の部厚きレンズ鳥帰る

理髪師の鋏小刻み目借時

ひさびさに割烹着つけ春まつり

昼も寝る夫となりたり柿の花

蛇消えし納屋の大甕動かさず



北九州 横田敬子

三千の牡丹崩るる雨の中

散り際の牡丹の紅のもつとも濃し

惜しみなく剪つてくれたる牡丹かな

なんじやもんじやみくじ結びしごときかな

落ちさうなおんぶの首や麦の秋

長崎 坂口晴子

紐の端紐に納めて粽結ぶ

葉桜や平らになりし犬の墓

青空を大きく吸ひて海女潜る

菖蒲湯や五右エ門風呂のありしころ

多佳子忌や櫛目涼しく通しけり

熊本 松田明子

漆黒の闇に静もる鶴の宿

煎餅布団一枚だけの鶴の宿

青空へ分け入る鶴を見送れり

鶴引きし田に村人の戻りけり

鶴^{から}帰り空の保護舎の残さるる

大宰府 山本則男

業平のかきつばたなら見てゆかむ

管玉の色に湧き出す泉かな

重心を真中に背負ふかたつむり

どこからも正面なりし振れ花

夕月に夕菅色を濃くしたり



大阪 井上 和子

如月や鳥の羽根浮く軒の桶

天窓のあまねき光桜どき

蝌蚪育ちゐる陵の濁り水

揚梅の落ちては石を曇らす

蛭路地に積むとろ箱や夏つばめ

太宰府 西住 三恵子

鍬の端にゆつくり覚めし初蛙

水換ふるつひに目高の一匹に

つちふるや鐘楼ぐるり千社札

どちらかと言へば気短燕の子

家族てふもたつたの二人豆御飯

長崎 仲里 奈央

だんまりを決め込む夫や春埃

入学の子の声響く体育館

一年生角曲がる迄見送りぬ

見つめ合ひ鼓動速まる縞蜥賜

常連と二言三言梅雨に入る

大野城 森 田 明 成

葉ざくらや遠忌は寺で略装で

町中の蛙あつめし代田かな

出水川途方に暮れしごと巨石

重なれば模様うまるる古簾

薫風やながらへて飲む不老水✿

糸舟 小林 朱夏

鶯の明日無きごとく鳴いてをり

急ぐとき殻重くなる蝸牛

沢蟹の挑む形して穴に落つ

暫くは我が手と遊ぶ天道虫

鈴虫や鳴かずにをれぬこと多し

兵庫 林 徹也

亡き母に後の世を問ふ端居かな

黙禱に始まる句座や夏椿

数独の終のひと榊明易し

記念樹の根詰まりほぐす子供の日

万緑や銀山跡に無縁墓

粕屋 吉田 菫

はじき豆食うて帝国興亡史

朝市の傘すり抜くる燕かな

天牛の髪より空の始まれり

ほうたるのひとつぶとなり川のぼる

ひと息に文書き上ぐる螢の夜

長崎 松尾 龍之介

歌人もと北面の武士山桜

百姓の手に一握の春の土

白藤の飛沫のごとき咲き始め

母の日の雀尾を立て強気なり

五月野にハーレーダビッドソン眩